児童園だより

第一七号
平成二七年三月二五日発行

たくさんの思い出を胸に

今年は、珍しく退職する職員と卒園する児童のない年になりました。華やかな卒園式がないのは少し寂しい気分ですが、それに負けないほど感動する行事があります。それは、保育園や学校の卒園式、卒業式です。

この三月で保育園や学校を卒園卒業する児童園の子どもは、保育園児三名、小学生三名、中学生一名です。保育園や学校で作ったたくさんの思い出を胸に、四月からは新しい世界へと進みます。大きな夢を持ち、逆境に負けることなく歩んでほしいと願います。

新任職員紹介

平成二六年度から新しく四名がスタッフに加わりました。それぞれの職員に、自己紹介を兼ねて抱負などを寄稿してもらいました。どうぞよろしくお願いいたします。

A・T【調理員・栄養士】

炊事、幼児の兼務職員としてお世話になっています。

私は以前、幼稚園で勤めていた経験はありますが、幼稚園と児童園では子どもたちとの接し方に異なる所が多々あり、当初は戸惑いもありました。しかし日々生活をしていく中で、子どもたちと会話をしたり触れ合ったりしていると、その戸惑いも薄れていきました。児童園ではまだ経験が浅く未熟な所がありますが、子どもたちと共に考え、共に感じながら私自身も職員として成長していきたいと思います。

私は毎年何か目標を作り、それに向けて取り組んでいます。去年はハーフマラソンに出場し、完走することができました。今年は登山に挑戦します。私の様々な経験が、子どもたちとの関わりに生かせたらいいなと思います。

Y・T【児童指導員】

幼児担当として小さな子どもたちと一緒に毎日を過ごしています。働き始めて一年が経とうとしている今も、分からない事や戸惑う事ばかりで、人間相手の仕事の難しさ、自分の未熟さを日々痛感しています。それでも、子どもたちの成長や笑顔に救われ、先輩方に支えていただいて、少しずつですが職員として成長できているかなと思います。子どもたちの小さな変化や発信を見逃さず、常に寄り添っていかれるよう、自分の出来る事を精一杯やっていきます。

A・M【児童指導員】

女児担当職員としてお世話になっております。

最初の頃は気持ちに余裕がなく、毎日の生活の流れを掴むことで精一杯で、子どもたちともどう関わってよいのか分からず、苦戦する毎日でした。しかし、もうすぐ一年が経とうとする今、先輩方や子どもたちのおかげで、大変ながらも楽しく充実した毎日を送ることができています。まだまだ分からないこともたくさんありますが、先輩方の姿や、子どもたちと生活を共にする中で、多くの事を感じ、学び、吸収していきたいと思っています。

E・M【保育士】

松本児童園の男児担当職員となり、もうすぐ一年が経とうとしています。最初の頃は、ただただ言われた事をこなそうと必死で、子どもたちと思うように関われませんでした。今では仕事にもだいぶ慣れ、子どもと話したり出掛けたり遊んだりする中で、少しずつ関係が出来てきたかなと思います。しかし、まだまだ未熟者で、毎日が勉強です。先輩方から学び、生活の中から学び、子どもから学び、子どもとともに一歩ずつでも成長していきたいと思います。心にゆとりを持ち、笑顔を忘れず、これからも精一杯頑張ります。

第三者評価結果が公開されました

全国社会福祉協議会から、社会的養護施設第三者評価結果が公開されましたので総評を掲載いたします。結果の詳細につきましては、全国社会福祉協議会のウェブサイトをご参照ください。当園のウェブサイトから見ることもできます。

【特に評価が高い点】

○地域に根ざした養育・支援

昭和二五年からの歴史と、都市部近郊の住宅地という恵まれた立地環境から、地域に根ざした養育・支援が行われている。市の民生・児童委員が設置主体で作った施設という特徴から、日常的に地域の民生委員を始め、関係機関との連携が密に保たれ、開かれた施設運営が出来ている。

子ども達は、「地域の子ども」として、地域住民に愛され守られて生活している。また、地域住民にとっても、地域行事や防災上の点からも「松本児童園」は地域に欠かすことの出来ない社会資源として活用されている。地域住民・地域自治会との良好な関係を維持し、より一層地域に根ざした養育支援を期待したい。

○食事と学習の支援

建物は大舎制の造りではあるが、幼児、各ユニット、グループホームごとに家庭的な雰囲気での毎日となるよう配慮されている。夕食はユニット毎に食を通じたコミュニケーションをとり、和やかに食卓を少人数で囲んでいる。陶器の食器、彩り良い食材での温かい食事が工夫されている。高年齢の子どもの遅い時間にも対応し、年齢やグループごとに施設外での食事を楽しむ機会が設けられている。栄養士が食育計画を作成し、職員全体で食生活に必要な知識や判断力を習得できるように努めている。

ユニット毎に宿題などにも使える部屋（娯楽室、プレイルーム）が設けられ、中高生は個室を設け、学習ボランティアや塾を活用して基礎学力の定着と学習の習慣化に努めている。進路選択に際しては高校進学を勧め、子どもが自己決定できるように、職員は根気強く一緒に考えている。寄付金（あずさ基金）を活用した経済面での支援体制を整備し、進学後の心強い支援体制の一つとなっている。

○外部の検証委員会による苦情対応

日常的に子ども達からの意見・要望や苦情などの声に耳を傾ける雰囲気が園内にあり、苦情箱に寄せられた苦情については、年三回の「検証委員会」で第三者委員や地域の民生委員、児童相談所や市の関係部署職員などを交えて処遇を検証し、改善に繋げている。

【改善が求められる点】

●組織化した改善への取り組み

施設のある地域の住宅化、児童福祉に対する関心の高まり、そして、情報化社会での新たな犯罪や思わぬトラブルへの遭遇など、施設や子ども達を取り巻く環境や社会情勢が日々変化してきている。このような状況で起こる新たな問題や課題に対し、施設の持つ良い伝統を守りながらも、積極的且つ迅速に対応が必要になっている。担当者のみならず、全職員の参画による改善とその周知徹底、それを機能させる取り組みに期待する。

●標準的実施方法の文書化

職員の幅広い年齢層や多様な価値観に接することは、子どもにとって有益な環境である。しかしながら、養育に関するマニュアルや職員への周知が十分とは言い難いことにより、職員間で対応や基準に細かな食い違いが出てしまっている。また、子どもの抱えている課題の複雑化や困難化に伴い、子どもの状態に応じて柔軟な対応も求められている。管理運営規程を基盤とし、ユニットごとに業務手順やマニュアルは作成されている。しかし、安全性、プライバシーの保護、設備等へ留意点も含めて、養育や支援の内容ごとに標準的な実施方法の文書化が養育・支援の質を担保するために有効と思われる。

●自立に向けての支援

子ども一人一人の個性を尊重し、受容的・支持的な態度で子ども達に接している。しかし、子どもの発達段階に応じて、自立に向けて経済観念が身につくような生活プログラム、自立を見据えての食育は不十分である。さらに、成長の過程を振り返る機会を持つことは、自己肯定感を育むことや自分らしく生きる力につながってくる。一八（二十）歳から社会に出て行かなければならない現実に向き合った時、自立に向けた「生活力」や「精神力」などの「生きていく力」の育成に、一層の取り組みが必要である。